

盧見曾年譜

市瀬 信子

盧見曾は清代中期、主に揚州で活躍した人物である。清代を代表する学者文人のパトロン、雅雨堂叢書の出版など、清代文化の重要な局面に関わりながら、彼に関する資料や論考は極めて少ない。そこで、基礎資料を提供するために、年譜を作成した。広い交友を誇った盧見曾であるので、年譜は、盧見曾の生涯を知るためのみならず、当時の文人学者を知る手がかりともなると考える。

〔キーワード、盧見曾 揚州 乾隆〕

はじめに

盧見曾（一六九〇～一七六八）字は抱孫。雅雨と号した。山東德州の人である。康熙六十年に進士となり、任地を転々としたが、乾隆元年～乾隆四年、乾隆十九年～乾隆三十年の間、揚州転運使となり、その間、揚州文化の最盛期の立役者として活躍した。

例えば、揚州八怪ら芸術家のパトロンとして芸術の復興に努め、また恵棟、戴震ら揚州学派のパトロンとして學術の興隆に貢献した。出版の方面では、雅雨堂叢書に代表される書物の刊行でも知られる。雅雨堂刊本は、盧見曾座中の学者たちの校訂を経て、底

本の確かさ、校勘の正確さ、装幀の豪華さ等、全てにおいて優れた刊本として評価が高い。

また、彼の揚州在任中に開かれた詩会の隆盛は、王士禛以来の詩壇の風雅と称され、当時その名を知らぬ者はなく、彼の名を慕って全国から著名人が次々に揚州を訪れ、盧見曾のサロンには天下の名士が集った。¹⁾

しかし、当時の知名度にもかかわらず正史の中に盧見曾の伝は見えない。それは、彼が清代を代表する疑獄事件の容疑者として捕らえられ、獄中死したためである。これは揚州転運使時代、塩商と結託し公金を横領したとされる事件であり、当時関係者の多

くが処刑され、また紀昀など著名人が捜査の秘密を盧見曾に漏らしたとして処罰される大事件であった。盧見曾はその死後、家産を没収され、未刊の著作は全て焼却された。自著は殆どが未刊であったために、作品は失われ、盧見曾の業績は、雅雨堂刊本の刊行と、パトロンとしての活動以外は今日知られていない。彼自身の文学的業績として今日まとまった形で見られるのは、一度目の揚州転運使を誣告により罷免せられ、塞外に出された時の詩集『出塞集』と、死後に子孫が散逸した遺詩文を集めた『雅雨堂詩遺集』『雅雨堂文遺集』のみである。^(三)

しかしながら、揚州文化の中心にいた盧見曾の存在は大きく、例えば、清代を代表する二人の学者惠棟と戴震、また詩人袁枚と揚州八怪の一人鄭燮は、いずれも盧見曾の元で初めて対面した。鄭燮以外の揚州八怪も、皆盧見曾と親しく交際し、盧見曾は彼らの活動を支援した。盧見曾の雅雨堂刊本の刊刻には、著名な学者、詩人が参加し、一時代の文化が盧見曾を中心に花開いたと言っても過言ではない。

このように、清代中期の重要人物達は、多くが盧見曾に関わっているため、盧見曾の事績を明らかにすることは、清代中期の人間の繋がりを知る上で重要な役割を果たすことになると考えられる。

そこで、盧見曾の年譜を作成し、その生涯をできるだけ明らかにすることを試みた。

しかし、罪人となったため、関係史料が限られ、特に本人の詩文の大半が失われていること、史料に採り上げられることが少な

いことなど問題は多い。

それを踏まえた上で、現在調査できた資料から年表を作成した。

年譜凡例

(一) ◆以下に事項を、◇以下に盧見曾の作品を示す。

(二) 引用文中(＊)で示される内容は、原文になく、論者の加えた補足である。

(三) 頻出の資料の幾つかは以下の略号を以て表す。

- ・ 盧見曾『雅雨堂文遺集』↓『文集』
- ・ 盧見曾『雅雨堂詩遺集』↓『詩集』
- ・ 『碑伝集補』卷十七監司「故兩淮都転運使雅雨盧公墓誌銘」盧文弨↓「墓誌銘」
- ・ 『清史列伝』卷七十一「盧見曾」↓『清史列伝』
- ・ 王昶『湖海詩伝』卷二「盧見曾」↓『湖海詩伝』
- ・ 「鄭板橋年表」(『鄭板橋集』上海古籍出版社 一九六二年)↓「鄭板橋年表」(上海古籍)
- ・ 「鄭燮年表」(『鄭燮評伝』王同書 南京大学出版社 二〇〇二年)↓「鄭燮年表」(南京大学)
- ・ 「鄭板橋年譜」(『鄭板橋』内山知也監修、明清文人研究会編 芸術新聞社 一九九七)↓「鄭板橋年譜」(芸術新聞)

年譜

康熙二十九年 庚午 一六九〇年

◆盧見曾、山東省德州に生まれる。父は道悦、康熙九年の進士で、河南の偃師県の知県であつた。その著に『公余漫草』、『清福堂遺稿』がある。

「盧見曾、字抱孫、山東德州人。父道悦、康熙九年進士、官河南偃師縣知縣。著有『公余漫草』、『清福堂遺稿』。」

(『清史列伝』)

康熙五十年 辛卯 一七一一年 二十二歳

◆郷試に合格し、舉人となる。沈樹本と会う。なお、翌春会試に沈は合格し、盧見曾は不合格となり、帰郷する。

「辛卯時、余又倅登賢書在京師、于大衆中、曾一接見而未浹洽、旋匆匆以落第歸里。後十年成進士。」

(『沈麟翁詩略序』、『文集』卷二)

「康熙五十年挙於郷。」

(『墓誌銘』)

康熙六十年 辛丑 一七二一 三十二歳

◆殿試に合格し、進士出身を賜る。

「見曾、康熙六十年進士。」

(『清史列伝』)

◆進士出身となった後、三年間の教育期間が設定されたため、北京に残って学ぶ。

「康熙五十年挙於郷、逾十年、中礼部試奉廷對賜進士出身。」

是科聖祖仁皇帝詔進士、未入館選者、一体命儒臣教習三年、公遂留竟學。」

(『墓誌銘』)

◆会試の際、汪応銓に答案を認められる。合格発表の後、北京での教習期間中、汪を師として詩・古文・詞を学び、また汪の作についても論じ合う。

「康熙辛丑見曾之成進士也、実出虞山杜林汪公之門。時同考官每房二人、石首鄭又梁夫子得見曾頭場卷、方擬薦、公閱二場表判大驚異、揚言于堂曰、人言北人不諳四六駢体、此豈吾南人之所有耶。于是大總裁急索閱之、公為朗誦其警拔之句、共擊節嘆賞、遂獲雋、榜發謁公、公為語如此、亦自以能得見曾為喜也。已見曾留京教習、方肆力于詩古文詞、每脫稿、必請正于公。公有作、亦必出以商論。」

(『容安齋詩集序』、『文集』卷二)

雍正三年 乙巳 一七二五 三十六歳

◆四川洪雅県の知県となる。

「雍正三年、出為四川洪雅縣知縣。」(『清史列伝』)

*「墓誌銘」は、「雍正元年、試於廷、名列一等。時世宗憲皇帝新御極、整飭吏治、重親民之任、凡進士在高等者、以知縣即用。公念贈公年高欲陳情歸養、贈公不許、謁選得、四川之洪雅縣。」と、雍正元年に「試於廷」とあるが、殿試とすれば、年次が合わない。また、同じ雍正元年に洪雅縣知縣に出たようにとれるが、それでは三年の教育期間を経ていないことになるため、一応、雍正三年に知縣となつ

た、という『清史列伝』に従った。しかし、三年を経たというのなら、雍正二年に任官しているはずであり、事実、同年の進士馬維翰は、雍正二年に任官しており（『碑文集』卷七）、疑問の残る箇所である。

◆洪雅県の知県となったために、「雅雨」と号す。

「嘗為洪雅県令、故以雅雨自号。」（『湖海詩伝』卷二）

◆洪雅県で雅江書院を建てる。

「在洪雅、建雅江書院。」（『墓誌銘』）

雍正四年 丙午 一七二六 三十七歳

◆父親が死去し、喪に服するために山東に帰る。

「四年、以憂帰。」（『清史列伝』）

雍正九年 辛亥 一七三一 四十二歳

◆喪が明けて、安徽省の蒙城県の知県に任命され、次いで六安州の知州に昇進した。

「服闋、九年、補安徽蒙城県知県、遷六安州知州。」

（『清史列伝』）

「葬事畢、復補江南亳州之蒙城県制府、以公協理州務、旋授六安州知州。」（『墓誌銘』）

◆六安州に居る間、李勉、高鳳翰と名所を巡る。

「嘯村皖人也。余為六安州牧、每至省、必与両君（李勉、高鳳翰）盤桓。後五年転運揚州。」

（『李嘯村三体詩序』『文集』卷二）

◆六安で廣颺書院を建てる。

「在六安、建廣颺書院。」（『墓誌銘』）

雍正十二年 甲寅 一七三四 四十五歳

◆亳州知州に転出する。

「十二年、調亳州知州。」（『清史列伝』）

「又調亳州。」（『墓誌銘』）

◆馬位らと交際する。

「余以雍正甲寅牧亳州、交関中馬思山位、……。」

（『馬相如遺稿序』『文集』卷二）

「余牧亳州、常与武功馬員外位、慈谿沈泰晏、賞牡丹、遷官後二君同赴都門、今与沈君再会揚州、屈指已六年矣。」

（『揚州雜詩』十二首其十一自注『詩集』卷上）

雍正十三年 乙卯 一七三五 四十六歳

◆廬州府知となり、鳳陽府知府を兼務し、半年足らずで江寧府の知府に抜擢され、一ヶ月足らずで穎州に転出する。ついで推薦を受けて江西饒九南道に任ぜられる。

「十三年、擢江南江寧府知府。未逾月、調安徽穎州。……尋以薦擢江西饒九南道。」（『清史列伝』）

「擢廬州府知、又奉檄撰鳳陽府事、未半載復奉諭調江寧。時穎州新升為府、以亳州並所屬之県隸焉。……擢江西広饒九南道。未久授両淮塩運使、復護理両淮塩政。」

（『墓誌銘』）

*「墓誌銘」の記載は年次を記さないが、「潁州が新たに府

に昇格した」とあり、『清史稿』卷五十八地理志「安徽」

に「潁州府……（雍正）十三年升府。」とあることから、

一連の転勤は雍正十三年のことと考えられる。なお、「未
久……」以下の、転運使になった時期は、他の資料の記述

から、翌年のことと考えられる。（乾隆元年の項参照）「墓

誌銘」には、『清史列伝』に見えない官職が記してある。「徐

大中丞讞語序」（『文集』卷二）に、「余起家県令八遷而転

運淮南、中謫従塞外三年、又四遷而復従事茲土、……」

とある。つまり初めて両淮転運使になる以前に八回任地を

移っていることになる。「墓誌銘」に記してある官職を数

えると、丁度その回数と一致する。

◆潁州に西湖があり、荒廃していたため修復する。また、湖に

功績あったものとして、欧陽脩、晏殊、呂公著、蘇軾の四賢

祠を修復する。

「潁有西湖、宋欧陽脩嘗築塞白竜溝、……。明季湖廢、見

曾欲復之、……。自是湖乃復。見曾又葺欧陽脩、晏殊、

呂公著、蘇軾四賢祠、……」（『清史列伝』）

◆博学鴻試が開かれ、盧見曾は李嘯村を推薦するが、不合格と
なる。

「乙卯天子開博学鴻詞試。予以君名薦、為学使者放帰。」

（『李嘯村三体詩序』『文集』卷二）

乾隆元年 丙辰 一七三六 四十七歳

◆両淮転運使に任命され、揚州に赴任する。

「乾隆丙辰、余転運両淮。」

（『国朝山左詩鈔』卷五十四「高鳳翰 盧見曾注」）

*なお、揚州転運使になった年を、「乾隆二年」とする説も

ある。王英志は「盧雅雨……康熙六十年（一七二一）進士、

乾隆二年（一七三七）任両淮都転運使、任職十多年。」と

述べ、乾隆二年に転運使になったとしている。しかし、以

下の複数の文献の記述から、両淮転運使となったのは、乾

隆元年のこととする。

◆平山堂を再建する。

「盧見曾任両淮塩運使、重建平山堂。」

（『鄭板橋年表』〈南京大学〉）

◆平山堂で程夢星らと会す。李勉、高鳳翰も参加し、詩を賦す。

「乾隆丙辰、余為都転塩運使駐此、与同年程太史夢星、大

会名士平山堂、登蜀岡眺望、問所謂竹西亭者。」

（『重建竹西亭記』『文集』卷三）

「後五年、転運揚州、大会名士于平山堂、時嘯村与西園俱

在座、賦詩懷古、意氣適上。」

（『李嘯村三体詩序』『文集』卷二）

◆方世泰^①の元に客となる。

「余以雍正甲寅牧亳州、……又三年転運揚州、始得客南塘。」

（『馬相如遺稿序』『文集』卷二）

◆誣告により吏議にかけられる。高鳳翰も嫌疑を掛けられる。

「乾隆元年、擢両淮塩運使、淮商習驕蹇、疾見曾整峻、中

以蜚語、遂被吏議。」^(二〇) (『清史列伝』)

「乾隆丙辰、余為都轉塩運使駐此、……問所謂竹西亭者、……余於時慨然有修復之志、不数月、輒以罪去。」

(『重建竹西亭記』(『文集』卷三))

◇「丙辰高西園鳳翰与余同被劾、賦以寄之」(『詩集』卷上)。

*丘良任は、「盧見曾は転運使に任ぜられて二年もしないうちに些細な嫌疑から取り調べを受けた。」としているが、^(二一)盧見曾自身の文章を信頼して、赴任した年である乾隆元年の内に嫌疑がかかり、具体的な取り調べが乾隆二年であったとする。

乾隆二年 丁巳 一七三七 四十八歳

◆官を罷免され、そのまま揚州に留まり、馬曰瑄^(二二)と清詩集について論じる。

「乾隆丁巳罷官揚州、嘗与馬秋玉論及此事(『清詩の選集』)。」

(『感旧集』盧見曾序)

*なお、このとき盧見曾がまだ在任中だったという説もある。

「鄭板橋年表」(『南京大学』)では、乾隆二年の項に、「盧見曾(雅雨)在任。『八怪』諸画家、詩人漸集揚州。」としてある。しかしここは、丘良任が「取り調べを待つて揚州に留まり、毎日飲酒著作を仕事としていた。」^(二三)としている通り、揚州にいたが罷免された状態であったものとする。

乾隆四年 己未 一七三九 五十歳

◆鄭板橋が盧見曾に詩を贈る。

「『送都轉運盧公』……此詩批墨迹作于乾隆四年十月廿日、盧罷官之時。」(『鄭板橋集詳注』(王錫榮 吉林文史出版社 一九八六年))

「一九三七 四年己未、……盧見曾為淮南塩運使。十月、先生作七律四首贈之。(詩後題云、『乾隆四年十月廿日、恭賦七律四首、奉呈雅雨山人盧先生老憲台、兼求教誨。』)」^(二四) (『鄭板橋年表』(『上海古籍』))

*「鄭板橋年表」(『上海古籍』)では、乾隆四年の項に「盧見曾為淮南塩運使。十月、先生七律四首贈之。」としているが、乾隆四年は塩運使を罷免されていた時期である。なお、「送都轉運盧公」の詩句に、「揚州自古風流地、惟有当官自怡。……一從吏議三年謫、得賦淮南百首詩。……」とあり、三年間の出塞が決定した後には作られた内容ととれる。出塞する盧見曾を送るのであれば、乾隆五年の作となるはずである。乾隆四年に盧見曾に送った詩が、果たしてこの詩なのかどうか、疑問が残るところである。

乾隆五年 庚申 一七四〇 五十一歳

◆出塞が決まる。揚州で準備をし、北京に立ち寄った後、九月九日塞外に赴く。出塞に際し、北京で馬樸臣らに詩を贈られる。

「五年、奉詔戍台。」

(『清史列伝』)

「乾隆庚申公駐維揚、治裝出塞。……重九出塞。」

（『出塞集』馬榮祖序）^{（二五）}

「（雍正甲寅）又三年轉運揚州、始得客南塘。旋以罪去、庚申徙塞外、思山饒余京邸招同相如兄弟、暨錢塘杭世駿、各賦出塞詩以贈。」（『馬相如遺稿序』『文集』卷二）

*ここに記される「出塞詩」は、次に述べる高鳳翰の「盧見曾出塞圖」につけられた詩を指すと思われる。^{（二六）}

◆高鳳翰らが、四月に「出塞圖」を描き、図に揚州の名士達が詩を寄せる。詩を寄せたのは、鄭燮^{（二七）}、吳敬梓^{（二八）}、楊開鼎、程夢星、閔廷容、王藻、馬位、馬樸臣、方原博、符曾、閔華、馬曰琯、吳廷采、周桀、孔伝檀、李薊、江昱、錢陳群である。盧見曾の題詩もある。^{（二九）}

「乾隆五年歲在庚申夏四月高鳳翰揮手左手書具呈本。」

（『出塞圖』高鳳翰題跋）

「解網深仁且莫論、孤臣猶在識天恩。三年便許朝金闕、万里何辞出玉門。……庚申夏五雅雨山人盧見曾識」

（『出塞圖』盧見曾題詩）

「戌台自揚抵都、余与先生固聞声相思久、是時乃把晤於宗弟思山邸舍、尊酒傾平生歡、持出塞圖索題。」

（『出塞集』馬樸臣序）

*「鄭板橋年表」〈南京大学〉では、「盧雅雨罷官候勘、不久謫戍塞外、鄭作七律四首送行、揚州諸画家作《盧雅雨山人出塞圖》、吳敬梓、李薊等在圖上題詩、高鳳翰罷官入獄、不久病斃右手。」とし、「出塞圖」を乾隆四年の作としている。

るが、高鳳翰による「出塞圖」は、高鳳翰の署名から、乾隆五年の作とすべきであろう。

◆門下生の夏宝伝、汪履之が、盧見曾の出塞に従う。

「六安秀才夏宝伝、生而任俠、出雅雨盧公門下。盧謫戍軍台、僮僕無肯隨者。夏奮曰、我願往。竟策馬出塞、三年後、与盧同歸。盧捐學正一官、所以報也。」

（『隨園詩話』卷十）

「汪履之為董公祠道士。……以奔受知于公。值公被逮出塞。汪隨之三年。」（『揚州画舫録』卷十）

「汪履方道人、自揚州從予出塞且三年矣、今歸省、其師口占送之」（『出塞集』）

乾隆九年 甲子 一七四四 五十五歲

◆塞外での任期を終え召還される。直隸の灤州の知州となる。

「九年、起謫戍、補直隸灤州知州。」（『清史列伝』）

「歲甲子、蒙恩起牧灤州。」

（『李嘯村三體詩序』『文集』卷二）

「乾隆九年召還、以直隸州知州用。」（『墓誌銘』）

◆馬樸臣、馬榮祖に『出塞集』の序を依頼する。

「猶憶余甲子賜還日、相如為序其出塞稿。」

（『馬相如遺稿序』『文集』卷二）

「越三年、甲子蒙恩賜環、相見問無恙、外即其塞外詩見示曰、君其為我論定之。」（『出塞集』馬樸臣序）

「已而手一編、示余曰、……君其為我、捫之序。」

（『出塞集』馬榮祖序）

*召還された年次については、複数の説がある。

袁行雲は、「出塞詩」について述べる中で、「高鳳翰《南阜詩集》卷七題詩、有「百首吟詩小度劫、三年読易晚知非」句、則赦歸当在乾隆六年也。」と、乾隆六年に塞外より帰ったとする。しかし、「出塞図」の署名から、出発が乾隆五年であることは確かで、三年を経て乾隆六年に帰るとするには無理がある。

また、『出塞集』の馬榮祖の乾隆十年の序には「盧見曾乾隆庚申駐維、治装出塞。……重九出塞。……癸亥長至賜環。」と記す。これによれば、庚申（乾隆五年）に出発し、己亥（乾隆八年）に帰って来たことになる。同じ『出塞集』の中で馬榮祖と馬樸臣の記す年次は異なっている。

なお、丘良任は、『出塞集』に五十一歳、五十二歳、五十三歳の誕生日に作った詩三首があることを指摘している。五十四歳の時の詩が無いのは、塞外から帰って来ていたためと考えると、五十四歳の年、つまり乾隆八年には帰って来ていたということも考えられる。丘良任は更に、「二年足らずで帰ったという説もあり、確定できない。」と結論を特定していない。

諸説あるが、盧見曾自身が記す年次が乾隆九年である（『李嘯村三体詩序』『馬相如遺稿序』）ことから、乾隆九年を召還の年とする。

乾隆十年 乙丑 一七四五 五十六歳

◆永州府の知府に抜擢される。

「九年、起謫戍、補直隸灤州知州。逾年、擢永平府知府。」

（『清史列伝』）

「天子察其才、授以州牧、逾年遷永平太守。」

（『出塞集』沈起元序）

◆李薊と俱に詩を作る。

「乙丑遷永平守、嘯村俱各有詩。」

（『李嘯村三体詩序』『文集』卷二）

乾隆十一年 丙寅 一七四六 五十七歳

◆『出塞集』に沈起元が序を寄せる。

「乾隆十有一年歲次丙寅、年弟婁東沈起元譔」

（『出塞集』沈起元序）

乾隆十二年 丁卯 一七四七 五十八歳

◆馬樸臣が北京で病死する。

「乾隆丁卯、桐城馬君相如以疾卒于京師。」

（『馬相如遺稿序』『文集』卷二）

乾隆十四年 己巳 一七四九 六十歳

◆同年の友、張元が敬勝書院の主講として迎えられる。

「余守永平之五年、歲己巳、延吾同年友張式九先生長公榆村孝廉來主敬勝書院。逾歲有詩一卷、其宗人寧遠太守忍

齋見而激賞、將為付梓、而問序于予。」

（『張榆村平山詩草序』『文集』卷二）

◇「己巳年菊花開盛于前」（『詩集』卷上）。

乾隆十六年 辛未 一七五一 六十二歲

◆長蘆塩運使となる。

「十六年、遷長蘆塩運使。」（『清史列伝』）

◆乾隆帝南巡し、二月に揚州を訪れる。

*王昶は、「修小秦淮紅橋二十四景及金焦樓觀、以奉辛未、丁丑兩次宸游。」（『湖海詩伝』）と記し、この年盧見曾が南巡に備えて揚州の名所を修理した、とする。確かに、盧見曾自身が、「乾隆十六年辛未聖駕南巡、始脩平山堂御苑、而濬湖以通于蜀岡。……」（『詩集』卷下「紅橋脩禊序」）と書いているが、長蘆塩運司は天津府にあり、盧見曾は揚州にはいない。盧が「紅橋脩禊序」に述べているのは、盧見曾自身が行ったことではなく、揚州の人士が行ったこと、として記しているとも考えられる。

◆冬、北京に公用で行き、黄叔林宅で、王士禛の『感旧集』の抄本を見る。馬曰琯と『感旧集』刊刻について話し合い、張元と共に『感旧集』補伝を作成する。

「辛未冬、以公役至京師、謁崑圃黃夫子於家、出所抄漁洋先生感旧集見示、拜受而卒讀之。……意歿後四十余年、猶為宋工之所購求珍秘、以轉授於予。馬君秋玉又不期而遇於京邸、不忘久要、慨然任剞劂之事。」

（『感旧集』盧見曾序）

「延淄川老友張孝廉逾村至署、採集故實、以長夏簿書余晨、秉燭操觚、倣遺山以下各詩選之例、人繫之以小伝。」

（『感旧集』盧見曾序）

乾隆十七年 壬申 一七五二 六十三歲

◆王士禛『感旧集』を刊刻する。

◇「感旧集序」。「乾隆壬申夏六月德州後學盧見曾撰」と記す。

乾隆十八年 癸酉 一七五三 六十四歲

◆再び兩淮塩運使として揚州に赴任する。

「乾隆丙辰、余為都轉塩運使駐此、……余於時慨然有修復之志、不數月、輒以罪去、更歷迎塞、閱十有八年、歲癸酉復轉運茲土。」（『重建竹西亭記』『文集』卷三）

「十八年、復調兩淮塩運使。……又修小秦淮紅橋二十四橋及金焦樓觀、以備宸游。」（『清史列伝』）

*二度目の揚州赴任の年次については、乾隆十九年説、乾隆二十年説もある。盧見曾自身は、「李嘯村三体詩序」（『文集』卷二）の中で、「歲甲子蒙恩起牧灤州、乙丑遷永平守、嘯村俱各有詩、甲戌乃復來茲土、回憶平山之會首尾踰十八年。」と、「甲戌（乾隆十九年）」に再び揚州に赴任した、と述べている。「鄭燮年表」（『南京大學』）も、乾隆十九年に「盧雅雨再任兩淮塩運使」としている。他方、乾隆二十年説をとるのは、『鄭板橋集』（傅抱石編 上海古籍出版社）

一九七九」と、「鄭板橋年譜」《芸術新聞社》である。^(三三)

盧見曾自身の記す揚州赴任の年が二通りあるため、説を決定しがたいが、一応『清史列伝』の乾隆十八年揚州赴任説をとることとする。

◆『国朝山左詩鈔』の編纂を始める。

「是編起於癸酉仲春、成於戊寅中秋。」

（『国朝山左詩鈔』盧見曾凡例）

◇「徵選山左詩啓」（『文集』卷四）。末尾に「乾隆癸酉春謹啓」と記す。

乾隆十九年 甲戌 一七五四 六十五歳

◆吳敬梓が揚州で死去し、盧見曾の援助で江寧に葬る。

「歲甲戌、……又七日而（*吳）先生歿矣。……先是、先

生子煊已官内閣中書舍人、其同年王又曾穀原適客揚、告

軫運盧公、殮而歸其殯于江寧。」

（程晋芳「文木先生伝」「勉行堂文集」卷六）

◆揚州の山堂で嵇璜、錢陳群らと和韻詩を作り、錢が詩を抄し、詩集一卷とする。それを平樓に刻んで残す。

「盧雅雨初軫運兩淮、有脩禊山堂詩。甲戌軫運与嵇拙修漕

運璜、錢集齋侍郎陳群有山堂紀遊和韻詩。集齋手録一卷。

泐石平樓。」

（『揚州画舫録』卷十六）

乾隆二十年 乙亥 一七五五 六十六歳

◆朱彝尊（一六二九—一七〇九）の『經義考』全書を刊行。康

熙年間に出版されていたものの未刊部分を新たに出版した。

『經義考』三百卷（清 朱彝尊 撰 康熙四十年序 秀水朱氏曝書亭刊 乾隆十九年二十年 德州盧氏 続刊）

「（*朱）作『經義存亡考』。刊出以後、又不斷修訂補充、身後四十六年盧見曾刊印其全書為『經義考』三百卷、是經学第一部專科目錄。」（『中国古代目錄学簡編』羅孟禎重慶出版社 一九八三 一一五頁）

「因出其祖（*朱彝尊）《經義考》後半未刻者、雅雨為刻其全。」（『湖海詩伝』卷六「朱稻孫」）

◆馬曰琯死去。

◇「哭馬嶠谷主事」（『詩集』卷下）。

◆故程夢星の所有であった篠園を購入し、三賢祠を建てる。

「乾隆乙亥、余再為兩淮運使、始購故翰林程君夢星之篠園、建三賢祠。」（『国朝山左詩鈔』卷十五「王士正」注）

「三賢祠即篠園。乾隆乙亥、園就圯、值盧雅雨軫運兩淮、与午橋為同年友、葺而治之。」（『揚州画舫録』卷十五）

◇「刻金石三例序」（『文集』卷一）。「乾隆乙亥」と記す。

乾隆二十一年 丙子 一七五六 六十七歳

◆王昶、盧見曾の子孫の教師となる。

「二十年乙亥、（*王）三十二歳。……兩淮盧雅雨塩運使

邀往揚州、皆不赴。……二十一年丙子、三十三歳。冬

将釈服、乃赴揚州運使之招。」

（『王述庵先生昶年譜』嚴榮編）

「十九年、甲戌、（*王）成進士。……明年、遊山左帰、陸太夫人病逝、哭泣尽礼。兩淮塩運使盧見曾聘先生課其子及孫、……。」（『漢學師承記』卷四「王蘭泉先生」）

*『漢學師承記』の記述では、乾隆二十年から家庭教師をしたととれるが、王昶年譜に従い、乾隆二十一年とする。

◆『雅雨堂叢書』刊行。

◆『雅雨堂藏書』刊行。

◇「刻摭言序」、「刻文昌雜錄序」、「刻匡謬正俗序」、「刻北夢瑣言序」、「刻封氏聞見記序」（『文集』卷一）。「乾隆丙子」と記す。

乾隆二十二年 丁丑 一七五七年 六十八歳

◆乾隆帝第二次南巡。南巡に備えて揚州の名所を修復する。

「修小秦淮紅橋二十四景及金焦樓觀、以奉辛未、丁丑兩次宸游。」（『湖海詩伝』卷二）

◆三月三日紅橋で脩禊を行う。盧見曾が七律四首を作り、和韻する者多し。鄭燮の和韻詩「和雅雨山人紅橋脩禊」四首、「再和盧雅雨」四首がある。和韻した詩人が千人とも七千人とも言われる。

「（*盧）丁丑脩禊紅橋。作七言律詩。……其時和脩禊韻者七千余人。編次得三百余卷。」（『揚州画舫録』卷十）
「盧雅雨先生転運揚州、以漁洋山人自命、嘗賦紅橋脩禊四章、一時和者千余人。」（『隨園詩話』卷十二）

◇「紅橋脩禊四首并序」（『詩集』卷下）。

◆王昶が盧見曾に依頼されて「紅橋小記」を作り、紅橋・篠園・平山堂の風景を記す。

「二十二年、高宗純皇帝南巡、猷賦行在、欽定一等第一、授内閣中書。是歳、（*王）仍留揚州、盧運使属撰『紅橋小記』以記篠園平山堂亭榭花木之勝。」

（『漢學師承記』卷四「王蘭泉先生」）

「二十二年……（*王）抵揚州、仍寓運使署中、而紅橋篠園平山堂亭榭花木風景益勝、運使属撰紅橋小志、以紀其盛焉。」（『王述庵先生昶年譜』）

◆戴震がこの年惠棟と揚州の盧雅雨の署内で知り合う。

「二十二年丁丑、（*戴）三十五歳。是歳識惠先生棟於揚之都転運使盧君雅雨署内。文集内題惠定宇先生授経図所云、自京師南還、始觀先生於揚之都転運使司署内者也。」（『戴東原先生年譜』段玉裁）

◆戴震が盧雅雨に依頼されて「金山志」を著す。

「又先生金山志一小冊、当亦此時塩運使盧君雅雨属先生渡江所為。」（『戴東原先生年譜』段玉裁）

◇「漁洋山人精華録訓纂序」（『文集』卷二）。「乾隆丁丑八月」と記す。

◇「黃山詩集節録序」（『文集』卷二）。「乾隆丁丑、公之嗣孫坤厚与其從兄坤宏、節録公詩四冊来、請余序。」と記す。

乾隆二十三年 戊寅 一七五八 六十九歳

◆多くの名士が揚州の盧見曾の元に集う。袁枚も盧見曾を訪

ねる。

「乾隆戊寅、盧雅雨転運揚州、一時名士、趨之如雲。其時劉映榆侍講掌教書院、生徒則王夢樓、金棕亭、鮑雅堂、王少陵、嚴冬友諸人、俱極東南之選。聞余到、各捐餽廩延飲于小全園。」

「揚州転運盧雅雨先生招遊紅橋集三賢祠賦詩」

（『小倉山房詩集』卷十四 戊寅）

◆盧見曾の元で、袁枚と鄭燮が対面する。

「投鄭板橋明府」「鄭虔三絶聞名久、相見邗江意倍懽。……」

（『小倉山房詩集』卷十四 戊寅）

「興化鄭板橋作宰山東、与余從未識面、有誤伝余死者、板橋大哭、以足踴地。余聞而感焉。後廿年、与余相見于盧雅雨席間。」

（『隨園詩話』卷九）

*なお、盧見曾の元での両者の対面については、鄭板橋関係の資料では乾隆二十八年のこととし、袁枚の「投鄭板橋明府」も、二十八年の作とする。しかし、袁枚の編年詩集である『小倉山房詩集』では、乾隆二十三年に収められている。また、「鄭板橋年表」（『上海古籍』）（『芸術新聞』）は「興化県志」に記載された袁枚の詩を挙げているが、『興化県志』にも年次は記されておらず、詩の制作年を乾隆二十八年とする根拠にはならない。ただ、『隨園詩話』の中で鄭燮が山東にいたときは面識がなく、「二十年後」に会った、としているが、鄭燮が山東范県に赴任したのは乾隆七年のことであるので、二十年後というところ、乾隆二十八年が近い

もしれない。しかし、「二十年」は概数を記した可能性もあるため、『小倉山房詩集』により、乾隆二十三年のこととする。

なお、鄭燮には、「和盧雅雨虹橋泛舟」「贈袁枚」の詩があるが、鄭板橋年表はいずれも乾隆二十八年の作とするが、それらも、乾隆二十三年の作である可能性がある。

◆盧見曾、惠棟の『周易述』を刊行する。惠棟六十二歳で死亡し、書は未完のままであった。

「先生年僅六十有二、余与先生周旋四年、為本其意而叙之如此。乾隆戊寅八月下浣。德州盧見曾書。」

（『周易述』盧見曾序）

「卒於乾隆二十三年戊寅五月、年六十有二。先生晚年、盧運使見曾延至刊上、如雅雨堂十種、山左詩鈔、感旧集、皆先生手寫焉。」

（『漢學師承記』卷二「惠周惕」）

◇『周易述』序。

◆『国朝山左詩鈔』を刊行する。

◇『国朝山左詩鈔』序。

◆方世挙撰『韓昌黎詩集編年箋注』十二巻を刊行する。

◇『韓昌黎詩集編年箋注』盧見曾序。序によると、方世挙の注に盧見曾が手を加えて訂正している。

乾隆二十四年 己卯 一七五九 七十歳

◆袁枚が盧見曾署中で盧の息子諤と会う。

「盧抱孫先生転運揚州、名流畢集、極東南壇坫之盛。己卯

十月、余飲署中、見其少子謨、年甫十六、玉雪可念。
後三十年、家籍沒矣。」
(『隨園詩話』卷六)

◆「旗亭記」を刊行する。

◇「旗亭記序」(『文集』卷三)。「乾隆己卯、山東僧父書于揚州之官梅亭」と記す。

◇「趙鉛山先生声調譜序」(『文集』卷一)。「乾隆己卯」と記す。

乾隆二十五年 庚辰 一七六〇 七十一歳

◆江春のところに芍薬が咲き、盧が絵と詩を、錢陳群が題額を贈る。

「江方伯名春。……乾隆己卯、芍薬開並蒂一枝。庚辰開並蒂十二枝、枝皆五色。盧転使為之絵画徵詩、錢尚書陳群為之題襲香軒扁。」
(『揚州画舫録』卷十二)

乾隆二十七年 壬午 一七六二 七十三歳

◆春、乾隆帝第三次南巡。

◇「刻金石録序」(『文集』卷一)に「乾隆壬午」とある。

乾隆二十八年 癸未 一七六三 七十四歳

◆紀昀の長女と盧見曾の曾孫盧蔭文が結婚する。

「紀昀長女適盧見曾孫盧蔭文、王昶或為大媒。」

(『紀曉嵐年譜』)

◆揚州転運使の職を辞す。

「『山左明詩鈔』三五卷、德州宋仲良先生之所輯也。……

歲癸未、盧君致仕歸里、(*紀)先生以全稿畀盧。予適授徒德州、趣盧付之梓、而盧以所輯未備為辭。」

(李南洞「山左明詩鈔序」(『南澗文集補』)

「乙酉後、湖上復増緑楊城郭、香海慈雲、梅嶺春深、水雲勝槩四景。署中文讌、嘗書之于牙牌、以為侑觴之具。謂之牙牌二十四景。後休致歸里、有留別詩云、……齒加孫冕余三歳、歸後公又九年……」(『揚州画舫録』卷十)

*『紀曉嵐年譜』は、李南洞の「山左明詩鈔序」を根拠に、乾隆二十八年に致仕したとする。また、盧見曾の留別詩に「歸後欧公又九年」とある。宋の欧陽脩(一〇〇七―一〇七二)は、揚州に慶曆八年(一〇四八)―皇祐元年(一〇四九)まで一年間赴任している。欧陽脩より九年遅く揚州を離れる、というのであれば十年間いたことになり、乾隆十八年に二度目の揚州転運使になって十年経過したことを示し、乾隆二十八年に致仕したことを裏付ける。しかし、『揚州画舫録』では、「乙酉後、湖上復増緑楊城郭、……後休致歸里」と記す。乙酉は乾隆三十年であり、その後に致仕して歸郷したことを示す記述ととれる。しかし、ここは致仕した後、山東に歸郷するまで数年間、揚州に留まったため、『揚州画舫録』のような記述となったものと考ええる。

乾隆三十年 乙酉 一七六五 七十六歳

◆乾隆帝第四次南巡。南巡に備えて、揚州二十四景を整備する。そのとき、盧見曾に「徳水耆英」の匾額が贈られる。

「高宗南巡。賜御書「德水耆英」匾額。時七十六歲。」

（『清史列傳』）

「盧見曾……乾隆乙酉、揚州北郊建拳石洞天、西園曲水、紅橋攬勝、冶春詩社、長堤春柳、荷浦薰風、碧玉交流、四橋煙雨、春台明月、白塔晴雲、三過留踪。蜀岡晚照、萬松疊翠。花嶼双泉、双峰雲棧、山亭野眺、臨水紅霞、綠稻香來、竹樓小市、平岡艷雪二十景。……乙酉後、湖上復增綠楊城郭、香海慈雲、梅嶺春深、水雲勝槩四景。署中文謙、嘗書之于牙牌、以為侑觴之具。謂之牙牌二十四景。」

（『揚州画舫錄』卷十）

◆鄭板橋死去。

乾隆三十三年 戊子 一七六八 七十九歲

◆六月、彰宝の奏上により塩引案が発覚し、現任の転運使、また前転運使であつた盧見曾らが逮捕される。盧見曾は九月二十八日獄中死する。家産を没収され、息子の盧謙も連座して軍台へ送られる。

「見曾……在揚州時、屢值南巡大典、歷年就塩商提引、支銷冒濫、官商並有侵蝕。至三十三年、事發、自塩政以下多罹大辟。見曾已去官、逮問論絞、死於獄中。籍没家産、子孫連坐、謙謫戍軍台。」

（『清史稿』卷三百四十一 盧蔭溥）

「乾隆三十三年九月二十八日故於蘇。年七十有九。」

（『墓誌銘』）

◆王昶、紀昀らが盧見曾に事前に家宅捜査を知らせ、財産を秘匿させた罪に問われ、免職される。

「三十三年、兩淮運使提行事發、先生与趙文哲坐言語不密、罷職」

（『漢學師承記』卷四「王蘭泉先生」）

「論擬劉統勲等奏、查辦兩淮塩引一案、盧見曾先得信息、藏匿警財、……所有漏洩此案情節之紀昀、王昶、黃駿昌均著革職。」

（『清實錄』高宗實錄卷八一三 乾隆三十三年七月）

*なお、佐伯富が「この疑獄事件は塩運使盧見曾の在任中に發覚したので、盧雅雨の本案と称せられている。」と、「在任中」の事件としているが、『清史稿』に、「見曾已去官」とあり、また『清實錄』高宗實錄卷八一四に、事件が発覚し、盧見曾の財産を差し押さえたこととした時のことを「盧見曾現留山東」と記しており、事件發覺の時点で盧見曾はすでに引退して故郷の山東に帰っていたことが明らかである。この時の家産の調査は山東の家を対象に行われ、その後「至從前運使盧見曾在兩淮日久、經手之事尤多。盧見曾亦著革去職銜解往揚州。」とあるように、揚州に連れて行かれ、揚州の獄に繋がれた。よって『清實錄』に「盧見曾亦著革去職銜解往揚州。」とあるのは、兩淮転運使の現職にあつたということではなく、引退後の地位を奪われたことを言うものと考えられる。

ただ、事件は『盛康皇朝經世文統編』卷五二 金安清「淮巖雜誌」に、「兩淮塩務。極盛於乾隆一朝。……自十一年至二十八年。核計各商應繳窩高価、匿未完繳、數逾千萬。致有

盧雅雨大案。」とあるように、乾隆十一年から乾隆二十八年の塩引を問題にしているのであって、事件の対象となっているのは、盧見曾在任中のことである。よって、「盧雅雨大案」と称されたのである。この事件は『清稗類鈔』獄訟類「兩淮塩引案」に「兩淮案為乾隆時三大案之一、蓋乾隆戊子、德州盧雅雨都軫見曾乞病在籍、以前在淮運司任提引事發、遂革職下獄死。」と記されているように、清朝三大案の一として知られている。

◆十月四日、袁枚が盧見曾を悼む詩を作る。詩の中で、盧見曾が塩運使として得た資金で士を養い、書物を出版し、貧しい詩人を助け、風雅を推進した、とその功績をたたえ、金錢が私利私欲のために使われたのではないことを弁護し、引退後の思いがけない悲劇を悼む。

「十月四日揚州吳魯齋明府招同王夢樓侍講蔣春農舍人金樓亭進士遊平山即席有作」 「……一個監司盧大夫、短身古貌白髭鬚。手握牢盆能養士、算清禹筭便刊書。海內詩人半貧者、一時麀至推風雅。爭學彭宣拜後堂、甘為夫差作前馬。夷門大會捧珠槃、從此紅橋酒不乾。自道歐蘇真再世、三賢祠內屢憑欄。旗亭雪滿新裁曲、上巳風和共采蘭。二分明月笙歌易、一片憐才意思難。功成身退稱知足、誰道危機有倚伏。……」

（『小倉山房詩集』卷二十一）

主要参考資料について

○「故兩淮都軫運使雅雨盧公墓誌銘」盧文弨（『碑伝集補』卷十七、『碑伝集三編』卷十八所収）：盧文弨（一七一七～一七九五）の父と盧見曾とが元々文学を通じて親しい関係にあり、盧文弨自身も親しく盧見曾と交際した。「墓誌銘」中に、「公既歿之三年、返公之子中憲君謙於戍所、今見任広平府同知、將葬公以銘幽之文來謁、公之仕績。綽有可紀、重以知己之感、其曷敢辭。」と、盧見曾の死の三年後、息子の謙が墓誌銘を依頼に来たことを記している。息子の持つて来た文に基づいて書かれており、任地の記録などが詳しい。「今以乾隆四十一年某月某日葬公於某郷」と記されており、盧見曾の死後最も早い時期に書かれた盧見曾の記録である。なお、この墓誌銘は、盧文弨の文章を集めた『抱經堂文集』には収録されていない。盧文弨の作品は、散逸したものが多く、『文集』に収められているのは、ごく一部とされており、これも『文集』に漏れた一文である。

○『清史列伝』：中華書局版の点校序言によれば、編纂人は不明であり、序跋もない。詳しい来源が分からない書物である。盧見曾に関しては、乾隆三十年までを記し、その没年、塩引案については一切記述が無い。しかし、事績は最も整理され、盧見曾自身の著述中の年次と多く一致している。

○『揚州画舫録』：李斗（？～一八一七）著。李斗が揚州に住んでいた乾隆二十九年～乾隆六十年の、約三十年間に、自分の目で見て、耳で聞いたものを記している。その意味で、当時の揚

州の雰囲氣を最も伝えてゐる資料の一つと言える。

○『湖海詩伝』：王昶（一七二四～一八〇六）著。揚州で盧見曾の門人となり、また盧見曾の孫の家庭教師も務め、塩引案に連座して罷免されるというように、最も盧見曾の身近にいた王昶が記した伝記である。

おわりに

この年譜は、あくまでも現時点で調査することのできた資料に基づくものであり、途中経過である。年次を確定できなかった箇所もあり、問題を多く残している。今後研究を続け、不確定の部分を明らかにし、より正確で充実した年譜を完成させたいと考えている。そして、この年譜が同時代の研究になにがしかの貢献ができ、また盧見曾という人物を見直す契機となることを願っている。

（注）

（一）『隨園詩話』巻六「盧抱孫先生輓運揚州。名流畢集、極東南壇坫之盛。」あるいは『揚州画舫録』巻十「公兩經輓運、座中皆天下士。」等の資料は、揚州での盧見曾のサロンの様をよく伝えている。

（二）未刊の詩集には、『雅雨集』、『平山堂集』、『邯鄲集』、『北平集』、『海門集』、『平山堂後集』、『里門感旧集』があった。

（三）字は厚余。縛翁と号する。歸安の人。康熙五十一年の進士。

（四）字は杜林。梅林、容安齋と号する。江蘇常熟の人。康熙五十七年の進士である。官は贊善、引退後、鍾山書院の主講となる。死後子孫がいなかったため、門人であった盧見曾が王昶銓の詩集を出版した。

（五）字は嘯村。安徽懷寧の人。雍正の諸生。揚州八怪の一人として知られる。盧見曾の門人で、盧見曾出塞の折、「出塞図」に詩を寄せる。乾隆二十一年、盧見曾の選刻により、『嘯村近体詩選』が刊行される。盧見曾が揚州輓運使だった間、常に盧見曾に随つて遊んだことが『嘯村近体詩選』秦大士序に見える。盧見曾のために「紅橋攬勝図」を作ったことが『揚州画舫録』巻十に記されている。

（六）字は西園。南阜山人、南村と号する。山東膠州の人。揚州八怪の一人として知られる。王士禛に私淑し、後に盧見曾の知遇を得た。乾隆四年に盧見曾の罪に連座して捕らえられたが、罪を認めず無罪となった。後右手が故障し、左手で書画をものした。そのため丁巳残人とも号した。

（七）字は思山。馬樸臣の宗弟。『出塞集』馬樸臣序に「宗弟思山」とある。陝西省武功の人。『出塞図』に詩を寄せる。

（八）『袁枚評伝』王英志（南京大学出版社 二〇〇二年 一一八頁）

（九）字は貞觀。又の字を履安という。南塘と号した。桐城の人。從兄の方世舉も盧見曾と交流を持った。

（一〇）『清史列伝』のこの記述は『出塞集』の沈起元序「（*盧）至兩淮輓運、有殊績。淮商習傲蹇、疾其整峻、利不能動、則中以蜚語、致被誣去官、而座台之行。」から採っている。ただし沈起元の序には事件の起きた年次が記されていないため、『清史列伝』

を挙げた。

(一一) 丘良任「盧見曾与《出塞集》」(文学遺産 一九八三年第四期)、同「盧見曾及其《出塞図》」(故宫博物院院刊 一九八三年第二期)。

(一二) 揚州の塩商。字は秋谷、嶠谷と号する。弟の馬曰璐と俱に小玲瓏山館において詩会を催し、厲鶚始め文人芸術家のパトロンとなった。有数の蔵書としても知られる。盧見曾と親交深く、盧見曾の刊刻した書籍は、多くが小玲瓏山館の書籍を用い、馬の賓客の手を借りて校訂を行っている。

(一三) 丘良任前掲論文。

(一四) なお、「鄭板橋年譜」(芸術新聞)では、詩題を「贈盧雅雨詩墨跡」とする。

(一五) 字は力本、又は力甫。石蓮と号する。江都の人。雍正の举人。官は知県。馬曰琯兄弟の一族。荊山書院、鳴鹿書院を創始する。書法を善くし、古文辞に巧みであった。

(一六) 「出塞図」は、故宮博物院にあり、論者は未見のため、以下丘良任「盧見曾及其《出塞図》」に引かれた資料の年次を参考にする。

(一七) 字は克柔。板橋と号する。江蘇興化県の人。詩書画で知られる。揚州では盧見曾との和韻詩を残している。

(一八) 吳敬梓。字は敏軒、一に文木。全椒の人。『儒林外史』の作者。揚州で盧見曾と交流し、「出塞図」に詩を寄せている。『儒林外史』中の、揚州塩運司苟政は盧見曾をモデルにしたとも言われる。

(一九) 丘良任前掲論文を参照した。なお、吳敬梓の詩は、「奉題雅雨大公祖出塞図」として「文木山房集外詩文」に収められている。鄭燮の詩は、丘良任が、「中華書局編印的《鄭板橋集・補遺》」有《和盧雅雨紅橋泛舟》一首、而集中未載題《出塞図》詩、所以這首詩

是鄭板橋的佚詩。」と指摘しており、詩集に収録されてこなかった佚詩である。盧見曾の題詩は、『出塞集』巻頭に「承恩出塞留別揚州諸故人」として収められる。

(二〇) 『清人詩集叙録』巻二十三(文化芸術出版社 一九九四 一七頁)

(二一) 字は殿伝。榆村と号した。山東淄川の人。進士にはなっておらず、同年というのは、举人になった時が同じことを指す。盧見曾を助けて『漁洋感旧集』の小伝を作成する。『緑筠軒詩』四巻がある。

(二二) 「鄭板橋年譜」(芸術新聞社)では、乾隆二十年の項には記載がないが、乾隆二十二年の項に「二年前に、再び兩淮転運使となっていた盧見曾が……」としている。

(二三) 字は尚佐。一に黼庭。晩年に拙堂と号した。諡は文恭。無錫の人。雍正の進士で、文淵閣大学士に至る。

(二四) 字は主敬。香樹と号した。盧見曾と同年の進士。乾隆帝と詩の唱和を行い、沈德潜と俱に、東南二老と称された。

(二五) 字は德甫、述菴と号した。学者として、蘭泉先生と称される。青浦の人。乾隆十九年の進士。乾隆二十二年乾隆帝南巡のとき、

盧見曾の幕下にて詩を作り、乾隆帝に認められ、南京で試験を受け、内閣中書舍人となる。三十三年盧見曾に朝廷の調査がゆくことをもらした罪で、紀昀とともに捕えられ、外地へ赴く。『湖海詩伝』四十六巻があり、中に盧見曾のことを記している。

(二六) 字は東原。乾隆の举人。訓詁学に通じる。盧見曾の上客であり、惠棟、沈大成が彼を奇人と目した。

(二七) 字は定宇。松崖、九曜斎と号する。経学に通じ盧見曾の上客であった。盧見曾の『雅雨堂叢書』などの校訂に参加している。

(二八)『戴震文集』(中華書局 一九八〇年)所収。

(二九)字は子才。簡齋と号し、晩年随園老人とも号する。浙江錢塘
県の人。盧見曾としばしば会い、詩を残している。盧見曾を尊敬
する筆致が詩話の中に散見する。

(三〇)『紀曉嵐年譜』賀治起、呉慶栄(書目文献出版社 一九九三)

(三一)字は穎長。揚州の塩商。馬曰琯と名を等しくした。詩会を開
き、名士を集めた。後、盧の疑獄事件の際に逮捕されるが、罪を
免れる。奇才の士で、彼の主催する集まりはいつも満席であり、「一
時之盛」と称された。

(三二)『清代塩政の研究』佐伯富(東洋史研究叢刊之二 昭和三十
一年 東洋史研究会)